

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

雨の罫ノ峰

16日は前線の影響で雨が降るという予報であった。しかしその雨の中、「雨の日には雨の日の楽しみ方がある」と、池工ではあえてクラブ山行を行なった。

場所は10年あまり前に、大町高山岳部が開拓した罫ノ峰仏崎ルート。この登山道開拓についてはこれまでも何度か紹介はしているが、新たな読者の皆さんもいるので、記録をお知らせする前に、改めて経過を書いておこう。

北アルプスの前山に位置するこの山（罫ノ峰）は、標高が1623m。高さこそ背後の北アルプスに譲るが、ピラミダルなその凛とした山容は、安曇野からは一際目立つ。大町高校は北アルプスのお膝元という抜群のロケーションと、そこを舞台に行われる全校登山、そしてそれをサポートする山岳部OB会などが山岳部の活動を支えてきた。2001年学校創立100周年を迎えたが、山岳部としても何か記念に残ることをしようと、いつも学校から見慣れている山に登山道を切り開いたのだった。

「あの山を開拓しろ！」最初は鶴の一声ならぬ顧問の一声で始まった。当時の顧問は言わずとした松田大さん。地元で許可を得て、のこぎりと地図、コンパスを手にしての作業が始まった。草やぶを刈りながら前進、慣れないのこぎりやビーバーに振り回され、できた虫刺されの痕や擦り傷はフロンティアの勲章となった。当時の2年生が昨年ヤズィックアグルと一緒に登った三戸呂拓也君や国体の成年男子チームの橋本今史君たち。僕にとっても思い出に残る面々である。・・・顧問を中心にこれらのメンバーの6回に及ぶ悪戦苦闘の末、標高差900m、総延長6kmの登山ルートが切り開かれたのであった。

7時45分、生徒8人、顧問2人で登山口の仏崎観音寺を出発。今回は、頂上を往復することにし、行きは僕が途中で指定した場所を地図に落とさせ、オリエンテーリング気分に登らせ、帰りにそのポイントを解説しながら下りてくるという形で生徒たちに読図をさせながらの登山を計画した。先の県大会は生徒たちの向上心に火を点け、読図ができるようになりたいという意欲を持たせるには最高の場であった。今回はその火が消えないうちに読図のための山行を計画をしたというわけだ。

通称ゴジラの背を喘ぎ喘ぎ登り、標高1190m地点北西の尾根との分岐点にあたる屈曲点で一本とる。心配された雨はそれほどでもない。樹林帯のところどころでは怪しげな白い色を発しているギンリョウソウが出迎えてくれた。この先はシャクナゲが見事なのだが、今年は・・・残念ながら外れ年、もう一つであった。それでも時々咲いている花を見て生徒たちは歓声を上げる。顧問の藤田さんと話をしながらゆっくり登っていくと、1250mピークの手前で生徒たちが集まっている。「先生あの白いのは？」と聞かれて、林の中をのぞき込むとそれはカモシカだった。時折白いカモシカがいると聞いたことがあったが、まさに目の前にいたのはその白いカモシカ。珍しいものを見ることができた。蟬の抜け殻をみつけてはみんなが集まり、ヒキガエルがいたといっちは捕まえてきて写メに収める生徒たち。何も言わずとも自然から学んでいる。

9時55分、1350m付近で2度目の休憩。シャクナゲのトンネルを通りながらこ

こは全く道がなかったところを刈り払ったんだそうだと、松田さんから聞いた苦勞話のいくつかを話しながら進んでいく。10時48分、北方に到着するがあえて休憩を取らず読図だけをさせてスルーする。先読みの読図ができていない生徒は現在地の同定がで



きていない様子なので、急斜面を下りながら、それとなくヒントを出すは何処吹く風。最低鞍部の先で少し藪が濃くなっていたが、慣れていない生徒はルートファインディングを失敗。ルートをロストしSOSの声がかかった。小生が先頭に出て、再び登りだしておよそ30分。11時40分に鍬ノ峰山頂に到着した。雨はそれほど激しくはなかったが、ガスが周囲を閉ざしており、景色を楽しむことはできなかった。

下りは当初の計画通り、読図ポイントとして僕が指定した箇所の答え合わせをしながらゆっくりと下った。1000mあたりまで下るとやや視界が開け大町の平も見え、疲れた生徒たちには一服の清涼剤となった。登山口に着いたのは3時40分。なんと登りとほとんど同じくらいの時間がかかってしまった。

編集子のひとごと

先日流れたNHKの番組は私の意図とはかなりズレた内容になっていて少しがっかりした。番組は制作者の意図でどうにでもなるということは十分承知しているので、そのあたりにも注意して言わんとすることを強調したつもりだったが、僕の言いたいことのほとんどはカットされ、「気象条件」について語った部分だけが取り出されてしまった。番組の取材を受けた後、若干その危惧があったので、番組でも映し出された大西英樹さんの撮影した例の6人が映っている写真を提供した際、ディレクターに、「僕は、今回の事故の原因について、『気象条件』だけだとは思っていません。いずれにせよ、6人パーティは引き返すべきところで引き返さなかったというのが大きな原因だと思います。そこに加えてパーティの問題、個人の能力の問題などいくつかの条件が重なることで事故につながったと考えています。気象の急変がそれらに追い打ちをかけたのだと思います。いずれにせよ、未組織登山者のこういった遭難事故は、予備軍も含めると相当数あるはずで、事故にならなければそれは武勇伝になってしまうわけです。そのあたりに警鐘をならせるような番組にしていただければありがたいです。」というメールを送ったのだったが・・・。

しかし番組では「気象」と「低体温症」ということだけに原因を求め、僕の意図はぼけてしまった。1989年10月に立山で起こった中高年の大量遭難が教訓として活かされておらず、同じような事故がまた起こってしまったというのが本当に残念でならない。一昨日長山協会の理事会が開かれたが、その席でも若干そういう議論が行なわれたが、山岳協会としても、安全登山の普及と啓発に向けて何らかのアクションが必要だろうという意見もあり、山岳総合センターや中高年グループなど協会内のいくつかのグループからは、そのための具体的な提起もされた。(大西記)